# 結論

五行説は、もともと統一された学説ではなく、時令・占術・正統論等の諸分野に於いてそれぞれ別個に発展した理論であった。既に先秦期から、ある程度は分野を超えた共通点・影響関係が見出されるものの、相互に差異が多く、そういった差異を解消するための議論も見当たらない。

前漢期になると、諸五行説の中で、特に五徳終始・月令・洪範五行が儒家に用いられるようになった。ただ、系統ごとの相違は依然として残り、事物の配当や、用いられる五行の論理（相勝・相生・相沴等）は異なった。

こうした中で、前漢末に劉向が、易学に符合するように洪範五行・五徳終始を解釈・改造し、五行説の体系化に着手した。そして、劉歆は、五行を含む万象の数理を易理の下位に置くという大胆な構想の下で、五行については月令に基づいて諸説を改造し、統一を図った。

後漢期にも依然として相異なる諸説が並存したが、多くの学者たちによって、こうした分野ごとに見られる配当の差異を解消する説明が試みられた。公羊学に対抗するために左氏学者が修母致子説をひねり出したり、『周礼』を中心とした経学体系を構築するために鄭玄が月令の文言に難解な解釈を施したり、個々の動機はそれぞれであった。しかし、その背後には、五行が首尾一貫した理法であり、様々な文献（とりわけ経典）に見える五行説が体系的に整理されるべきであるという、共通した認識があったのであろう。そして、この認識・方針は、現存の資料を見る限りでは、劉向・劉歆に発するように考えられる。

劉向親子、とりわけ劉歆は明確に、諸学術の体系化を構想した（劉歆の学術体系化の構想は、『漢書』芸文志に見える）。五行説の体系化も、この構想の一環だったのだろう。

ただし、実際に着手したのは、専ら経学（律暦・制度を含む）に於ける五行説の統一である。易の説卦伝や卦気説、尚書の洪範五行、礼の月令、春秋の災異説、これらを易・書・礼・春秋の垣根を越えて結び付けたのが、劉向・劉歆の五行説であった。しかし、これら儒家に受容されたもの以外にも、前漢期には択日・時令・医学等の分野で五行説が存在している。『漢書』芸文志を見ても、五行に関すると考えられる多くの文献が、六芸略以外の類目に著録されている。劉向等の五行説は、それらについて言及するには至っていない。

また、劉向と劉歆とでは、それぞれの方針に若干の差異がある。劉向は一つ一つの文献的根拠をうまく結び付けることに腐心し、一貫した体例は見えにくい。一方、劉歆は壮大な構想に基づいて明瞭な体例を示し、時には文献の改造も辞さない。例えば、『洪範五行伝』について、劉向は本文を改造せずに『周易』説卦伝等に基づく解釈を施したのに対し、劉歆は本文を改造して『劉歆伝』と呼ばれる新たなテキストを作り、それによって月令の配当と合致させた。

後漢期、許慎や蔡邕・鄭玄等といった多くの学者たちは、劉向的な姿勢の方を採った。根拠とする文献の字句は改造せず、何とかうまく整合する解釈をひねり出す。『周礼』を中心とする体系を構想した鄭玄でさえ、それとうまくそぐわない月令の記述について、文面を書き換えずに、解釈を工夫することによって何とか乗り切ろうとした。また、班固は『漢書』五行志に於いて、個々の配当では劉歆説を採ることが多かったが、しかし、それでも時には劉歆説に従わなかった。劉歆の五行説の面目は個々の配当ではなく、整然と統一された体例にあるのだから、時に従い、時に従わないという班固の折

衷的手法は、劉歆の方針を引き継いだとはやはり謂えない。

また、所謂「五行伝月令」や『春秋繁露』五行順逆・五行五事は、『洪範五行伝』と月令を融合させて造作された文献であり、解釈によってではなくテキストの操作によって配当を統一するという点では、劉歆の手法に似ていると謂えるかもしれない。しかし、原典に無い字句を多く付加しており、しかも内容に不明瞭さや自己矛盾があり、劉歆の厳密さや壮大さには全く及ばない。

思うに、劉歆の、易理を頂点とした「一――三・五」の構造や、月令を中心とした五行説の統一は、堅牢に完成されているために、後人には応用しにくかったのではなかろうか。『白虎通義』五行・蔡邕『月令問答』・鄭玄『尚書大伝注』に見られるように、後漢期の経学者たちは医学・十二生肖・星座といった領域に於ける知識をも取り込んで、五行説を拡大した。その際に、劉歆のモデルはあまりにも堅固で、五行説を拡大するには不都合である。劉向のように、柔軟に（悪く言えば場当たり的に）解釈することによって異説を結合する手法の方が、扱いやすかったのであろう。

ともあれ、経学に於ける五行説は、劉向・劉歆を境にして性格が明らかに変わった。時令や五徳終始といった領域ごと（あるいは学派ごとと言えるかもしれない）にそれぞれ別個の説を為して干渉していなかったのが、劉向等以降には領域を越えて通じる解釈を求めるようになり、時に融合して新たな文献を造作するまでに至った。この原因は、いくつか考えられる。後の学者たちが劉向・劉歆から影響を受けたことや、五行を分類概念以上の「気」として捉える認識の発達に加えて、書籍が前漢期に較べて入手しやすくなったことや、今文経学の成果を取り入れながら経説を構築する古文経学の手法という要素も重要であろう。また、宣帝期に石渠閣で五経の異同が議論されたように、学派を越えて論定を試みる思潮がちょうど劉向の頃から高まって来ていたという背景も考えられる。これらのことを検討するには、巨大な視野と、多岐に亘る知見が必要であり、筆者の能力は未だ及ばない。

本研究では専ら、五行説が前漢と後漢の間、劉向・劉歆を境として、議論の傾向が大きく変わったという現象を示した。この現象の背景・原因については、今後も継続して研究して行きたい。